

提 案 書

和気町での若者の居場所づくりを通じた和気駅前活性化

山陽学園大学 地域マネジメント学部 梶房悠飛・二木 倭・正平大輝 （指導教員：中村聡志）

1. はじめに—提案の背景と目的

和気駅前がかつて商店街として賑わいを見せていたが、現在は空き店舗が目立ち、かつての活気は失われている。駅の主な利用者は地元の高校生をはじめとする若者であるにもかかわらず、放課後や週末に気軽に立ち寄れる場所が駅周辺にほとんど存在しない。若者が遊べる・くつろげる場所がなく、地域住民と若者が自然に交流できる機会も乏しい状況が続いている。

こうした現状を踏まえ、本提案では「行ってみたくなる駅前のアイデアづくり」をテーマに、和気駅前に若者の居場所を創出することを通じて駅前全体を活性化することを目指す。2025年5月のキックオフから始まり、現地ワークショップ、先行事例の視察、和気閑谷高校との意見交換を経て得られた知見を総合し、具体的な改善策を提示する。

2. 和気駅前の現状と課題

(1) 駅前の現状

和気駅前は商業施設が少なく、空き店舗が目立つ状況にある。学生・若者が多く駅を利用しているにもかかわらず、放課後に気軽に立ち寄れる場所が乏しく、若者が自由に過ごしたり遊んだりできるスペースがほとんどない。また、地域住民と若者が自然な形で交流できる機会や場所も存在しておらず、世代を超えたつながりが生まれにくい環境となっている。

(2) 滞留・交流が重要な理由

若者の「滞留」と「交流」を生み出すことは、単なる賑わいの回復にとどまらず、地域全体にとって多面的な効果をもたらす。滞留の面では、飲食費等の支出による経済効果が期待できるほか、電車の待ち時間といった空き時間を有効に活用できるようになり、長い時間を地域で過ごすことで地域への理解も深まる。一方、交流の面では、防災・防犯など地域の社会的機能を支える基盤が育まれ、子育て世代を地域全体でサポートする土台にもなる。さらに、人と人とのつながりからイベントや新たな活動が生まれることで、駅前の賑わいが持続的に創出されていく。

(3) 和気閑谷高校との意見交換から得た知見

和気閑谷高校の生徒との意見交換では、現状の課題が具体的に浮き彫りになった。多くの生徒は通学以外で和気駅を訪れることはほとんどなく、電車の発車時刻に合わせて移動するため、駅での滞在時間は極めて短い。南口付近にはコンビニがあるものの、北側のカフェや美容院については高校生にほとんど認知されていない実態も明らかになった。

また、「遊べる居場所があればうれしい」という声が多く聞かれた。意見交換の中で、中央公民館にカラオケや学習スペースがあることを発見した生徒もいたが、駅からの距離や、高校生向けの企画があまりないことなどが足を向けにくい要因となっていた。

この意見交換を通じて、駅前にすでに「公民館のような地域資源」が存在するという新たな視点を得ることができた。公民館と連携しながら、公民館にはない機能をエンターワケが担うという役割分担の可能性が浮かび上がった。

3. 先行事例：ユースセンターいばら（井原市）

2025年12月に視察したユースセンターいばらは、2024年に地域おこし協力隊2名が高校生の居場所づくりを目的として立ち上げた施設である。空き店舗を活用したスペースに、Wi-Fi・充電設備・プリンター・ボードゲーム・漫画などを揃え、「自由に過ごせる場」をコンセプトとしている。

最大の特徴はスタッフの関わり方にある。「求められたら出ていくスタンス」を徹底し、若者の自発性を引き出すことを重視している。開館時間は平日12:30～19:00（一部21:00まで）、登録者数は156名（2025年4月時点50名から急増）に達した。利用者は1日0～10名程度で、課題やゲームをひとりで楽しむほか、スタッフとの会話や中学生向けイベントなど多様な使われ方をしている。

この事例から得られた教訓は、「まず自由に過ごせる場をつくり、そこから自発的な取り組みを生み出す」という段階的なアプローチの有効性である。運営資金を地域おこし協力隊の活動費から捻出するなど、小さなスタートから始めた点も参考になる。今後は他世代を巻き込んだイベントの展開や、SNSでの広報強化が課題として挙げられており、任意団体「ゆめこころラボいばら」が将来の受け皿として機能する予定である。

4. エンターワケ改善提案

本提案では、和気駅前に既存の「エンターワケ」（現在は多目的スペース・3階部分は学習塾）を若者の居場所として再整備することを提案する。エンターワケが抱える課題は、高校生のニーズとのギャップと、利用する際の心理的ハードルの高さである。以下の改善策によってこれらを解消し、段階的に地域のハブへと発展させることを目指す。

(1) 目指す施設像

エンターワケを「時間が空いたら自然と思い出す場所」とすることを目標とし、以下の3段階で発展させていく。

- 第1段階：若者が自由に活動できるベース（基地）としてのエンターワケ
- 第2段階：公民館・近隣施設との関係性構築
- 第3段階：住民・高校・公民館・役場などと連携する地域のハブ（結節点）

(2) 開館時間の見直し

現在の開館時間は高校生の放課後ニーズに対応できていない。ユースセンターいばらを参考に、以下のモデルを提案する。

- 平日（通常時）：15:00～19:00
- 試験期間：15:00～21:00（延長開館）

(3) 滞在環境の整備

若者が長居したくなる環境を整えることで、駅前への自然な立ち寄りを促す。

- Wi-Fi環境の見直しと強化（スピード・安定性の向上）
- 延長コード・スマートフォン充電器の設置

- 飲食可能な環境づくり（軽食・ドリンク持ち込み OK など）
- 自習スペース・ボードゲーム・漫画などリラックスできるコンテンツの導入

(4) スタッフの常駐

ユースセンターいばらの運営から学んだ最大の教訓は「スタッフの関わり方」の重要性である。開館時間中は常駐スタッフを配置し、以下の役割を担う。

- 利用者の相談相手・話し相手として安心感を提供（求められたら出ていくスタンスを徹底）
- 利用者の自発的な活動のサポート
- 利用者や近隣施設を巻き込んだ企画の立案・実施

(5) 若者が楽しめる活動と利用方法の拡充

- 月1回のイベント開催（居場所カフェ、ワークショップ、体験型講座など）
- Instagram など SNS を活用した積極的な広報発信
- 和気閑谷高校文化祭の別会場としての活用
- 選挙会場・健康診断会場など公的利用によるさまざまな世代との接点創出
- 企業の出店ブースやポップアップストアの誘致による賑わい創出

5. 期待される効果

- 利用する心理的ハードルが下がり、若者が自然と足を運ぶようになる
- エンターワケへの愛着が育まれ、地域への帰属意識が高まる
- 若者の滞留時間増加による駅前の経済効果の向上
- 公民館・高校・役場との連携を通じた多世代交流の促進
- 若者の自発的な活動・イベントが生まれ、駅前の賑わいが持続的に創出される

6. まとめ

本提案の核心は「小さな一歩から始める」という姿勢にある。まずエンターワケを「時間が空いたら自然と思い出す場所」として整備することで、若者の日常的な立ち寄りを促す。その積み重ねが、公民館・学校・行政との連携へと広がり、やがてエンターワケは地域全体の交流を生み出すハブ（結節点）へと成長していく。

和気駅前の活性化は、大規模な開発や多額の投資なしでも実現できるのではないだろうか。若者が自由に集える場をひとつつくること、それが地域再生への確かな第一歩となる。エンターワケをその拠点として、住民・高校生・行政が協力し、持続可能な駅前の賑わいを共に創り上げていくことを提案する。

以 上